童

2014 年 4 月 25 日.

新学期が始まりました。今年 1 年よろしくお願いします。
山と積まれた剪定したばかりのリンゴの木。ネパールから帰ってきて初めて見た光景はこれでした。これが、毎年の新学期のそれ。子どもたちが、初登園する前に、チェンソーで薪にしておかないと、新学期がスタートしません。まさに、薪作業と共に慣らし保育が始まるのです。そんな訳で、薪作業と共に新学期が始まりました。そして、一週間、ずっと同じ野原で遊び続けました。その結果、薪もすっかり片付き、今冬も暖かい薪ストーブの恩恵にあずかれます。そんなロマンのある新学期は、とても幸せです。

今、桜は満開となり、スロープでは、見事なしだれざくらが、濃いピンクの色で楽しませてくれます。この花の下でお弁当を食べたり、ノビルを掘って、ノビル煎餅を作ったりして幸せな時を過ごしています。たんぽぽ、水仙たちも躍動感あふれる芽をだし、子どもたちに負けないほど、自己主張してくれています。

志賀高原や北信五岳の残雪とようやく始まったばかりの緑の芽吹き、黄色い草花、桜のピンクという地味なコントラストの中で、子どもたちの姿と声は、かなり映えています。

周囲の田んぼでは、田起こし作業が始まり、まもなく田んぼに水が張られます。そして、このあぜ道を歩くと、子供たちの姿が、鏡のように水面に映る季節がやってきます。1 番、自然の躍動感が溢れる季節です。この中で、子どもたちがどんなに大きく躍動していくか、とても楽しみな季節の訪れです。

大型連休は、家族で、そして、夢のたねでも十分お楽しみ下さい。

【ヒマラヤの風】

一週間ほど前に、エベレスト第 2 ベースキャンプで、大きな雪崩があり、ルート工作中のシェルパが 12 名ほど遭難死亡し、史上最高の遭難になったというニュースが入った。テレビ番組の世界 Q とかいうイモト何某という女性が、現在テレビ局と共に、エベレスト挑戦中という事だったが、まだ高度順応中で、まだ途中の村にいるから大丈夫というニュースも聞いた。

エベレストは、実は、大衆化された山になり、お金さえ出せば、登れる山になっているらしい。それも、天候の恵まれる 5 月１０日前後が登頂ピークで、頂上直下は、ラッシュ状態になるという事である。それは、フィックスロープといって、5 月登山解禁前に、優秀なシェルパ達（ネパールの地元のシェルパ族の人達の中で、エベレストに何度もガイドし、荷揚げしているプロの人）が、頂上からベースキャンプまで 3000 メートルに渡り、ロープを張っていることである。これの使用料を払い、ルートを使い、ある程度の技量と体力を備え、荷物やテントや食料や酸素ボンベをシェルパ達に持ってもらい（使用済みの酸素ボンベや荷物類は、下山時は、捨ててくる、軽量化して安全に下山するため）、登っていけば、天候を味方につければ、登頂はできるらしい。長男曰く、「お父さんも登れるよ。それだけの体力があれば」その引き換えに、莫大なお金を払う必要があるが。

その、事前工作中に遭難が発生したらしい。いわば、政府のドル箱のために（入山料、ﾌｨｯｸｽﾛｰﾌﾟ使用料など）シェルパは亡くなったのである。その後の新聞記事「シェルパ一人への政府保険金は、42000 円。これには遺族がやりきれず、シェルパ達は、今後、ガイドや荷揚げのシェルパ作業をボイコットする。そのために、日本を含め登山者には影響が出るらしい」しかし、ベースキャンプにいるカナダ人登山家達は「シェルパの人たちは、自分たちの兄弟、家族であり、そのボイコットを支持する」と言っていた。

このことは、今回のヒマラヤトレッキングの思いでもあり、長男の登山への思い入れでもあった。
長男は、単独登山にこだわっている。それは、自分の力だけでシンプルに登りたい。他人に力を借りたり（シェルパに荷物を持ってもらったり）、人工的な酸素を使ったりしないで。

エベレストトレッキングでは、ほとんどの人達がシェルパに荷物やガイドをお願いしており、20 キロ近い荷物を日本と同じように背負って歩いている私たちは珍しかった。荷運びは、シェルパ達の貴重な仕事であり、その仕事をお願いすることは、貴重な労働の場を提供する事であり、喜ばれることでもある。（お金のためであり、決して喜んでやっている仕事内容ではないと思うが）。一人で約４０キロの荷物を背負い、トレッカーや登山者に帯同して黙々歩く仕事である。ちなみに、日当は 1000 円位か。日本の価値感では、この値段で背負って頂き、身軽に歩いたほうが断然楽だろう。でも、私たちはできなかった。荷物を背負うシェルパと身軽に歩く登山者の光景は、とても幸せそうには感じられなかったし、ヤクや牛たちが登山者の荷物を背負い歩いている姿とダブってしまう自分がいたし。

長男は、自分のトレーニングになるから、お父さんやお母さんの荷物も喜んで持つと言ってくれ、妻も荷物をまとめて明日持ってもらおうとしたが、夫婦で一晩考えて、まだ息子の世話になるのはやめよう、まだ介護してもらう必要はないし、何よりも自分の荷物は自分で持ち、限界まで頑張り、どうしてもダメだったら考えようという結論になり、結局最後まで、自分の荷物は担いだ。

シェルパと登山家の関係で問題になるのは、金を払っているからと、奴隷や召使のようにこき使う、見下してしまう側面である。ヒマラヤの高峰を登った登山者達は、どれ位の割合かわからないが、相当数、このシェルパのガイドがあってこそ登れたと思う。その意味で、シェルパこそが最高のクライマーだというのがたぶん常識であろう。この、感謝と尊厳、尊敬が一番大切な所だと思う。経済の仕組み、労働環境、お金を生み出す資源、など様々な国の経済要素が複雑にあることはわかっているが、最終的にはお互いの人間の尊厳をどう考えるかだと思う。

その意味で、冒頭のカナダ人たちの言葉に救われた。シェルパ頼みにしている登山家達に、今回のボイコットは、とても影響があるという事であるが、とても歓迎すべきことだと思う。もう一度、人間の尊厳を問いただす出来事であると思う。

そういえば、東京の町田市の保育園に勤め始めた頃、子どもたちと歩道橋を渡りながら、道路工事の現場を見ていた。その時、傍らを通った親子の母親が、子どもにつぶやいた。「勉強しないと、ああいう仕事をする大人になるのよ」と。

その後、31 歳で長野市の保育園を辞めて、住宅の基礎工事の仕事を始めた。何もない現場で雨が降り始め、隣にある保育園の自転車置き場で雨宿りをした。「汚いからそこを使わないで下さい」と言われた。もちろん、私たちは土の仕事だから、身なりは汚いのは当たり前だが。この 2 点の出来事は、私の保育人生の基本になっている。

ヒマラヤの風に吹かれながら、この思い出が浮かんできた。

また、妻の話すお話の一つにネパールのシェルパ族の昔話「鳥になった妹」があるが、この話を、ヒマラヤのロッジの薪ストーブを囲んで聞いた事も、今回のトレッキングの忘れられない思い出であるが、同時に「おそばのくきはなぜ赤い」のお話も、ヒマラヤとは関係ないが、人間の尊厳を考えるシェルパ問題と私自身はだぶるものがある。